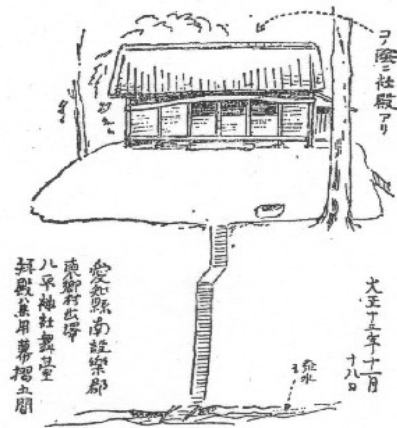


■■■ 狂言舞台と御仮屋の位置 ■■■

< I >

鳳来寺の狂言舞台の事実からも考え得ることであるが、この地方の狂言舞台の最も共通せる例は、氏神の拝殿もしくは拝殿に該当すべきものが、舞台であったことである。近年に至って、この風に次第に改造を加え、拝殿としての形式を多分に備えることとなり、一部分を社務所に充てたものもあるが、根本は舞台としての設計であって、拝殿としての意義はかえって希薄である。社殿はあれどもその陰に隠れていて、祭典以外の時に訪れてみると、その荒れに荒れた光景は、神社であるとの観念も浮かばぬくらいであった。年一回なり二回の祭りをを行う場所と言う以外には、極めて意義の乏しいものがある。



狂言舞台（東郷村出沢八平神社）

こうした形式の一方には、社殿または拝殿に対して、側面または向かい合って造られたものがある。現に私の生まれた村などはこの形式で、拝殿は厳然と備わっていたのであるが、狂言の行われる場合は、拝殿は楽屋に充てられ、見物席であった広場から拝殿への御坂の口には、舞台から花道が掛かったので、いきおい御坂は花道と舞台との通路になって、社殿に参拝せんとするものがあったとしても、近づくこともできなかった。これが明治三五、六年までの一般の状況で、舞台の上で演っていたことは、何の変哲もない歌舞伎芝居の模倣であっても、その根幹をなした気持ちは、余興などと言うべきものでなかった。

氏神境内における舞台なり狂言は、前にも言った如き状態にあったが、これに対して別に御仮屋における舞台があった。今日の神社中心すなわち敬神第一の思想から言うと、氏神祭典の御旅所なり舞台が、思いもかけぬ場所に建っていて、そこに御輿が渡御になっている。あるいはこちらが神社におけるよりもかえって重要であった場合もある。そうした場所へ舞台を持って行くにしても、何らかの理由があったはずだ。早い話が今日村の小学校や役場の敷地を選定するような、交通や眺望の便



狂言舞台（南設楽部長篠村横山）

宜からでないことは明らかである。たとえば何でもなし盆踊りの踊り場にしても、以前の風を辿ってみると、かならず踊りなり祭りをする因縁の場所であったことは、充分証明される事実がある。神社境内における舞台の例はあまりに簡単明瞭であるからこのくらいにして、次にはこの御旅所と舞台の関係を一通り見ることにする。

<Ⅱ>

前に言った鳳来寺山熊野三社権現の、祭典狂言の舞台の一つであった門谷の下の舞台は、地理的観念から言うと門谷の家並を離れて、さらに三、四町も行った村境の土橋の詰で、かねて道路の辻でもあった。現今もここを金剛堂とよんでいて、路傍に一基の石の祠があり、舞台跡は桑畑であるが、明治初年狂言のまだ盛んであった頃は、舞台に向かって方二間ばかりの金剛堂という堂があり、なかには金剛童子の八尺幾寸の木像が祀ってあった。火焰を負った憤怒の形相は、狂言場の混雑の間からも明らかに拝することができたという。いかなる由来によって、いつここに金剛童子を祀ったかは、今日では何ら知るべき材料はないが、これをここに祀った動機についてはほぼ想像することができる。舞台を囲んだ境内は古木が黒々と繁り合っ
て祭典以外には、近寄るものもない気味の悪い場所だったと言うが、この地こそ天正元年〔1573〕九月、長篠の城主奥平九八郎信昌の実弟、仙千代（一に千丸）が武田勝頼のために磔殺されたと伝説のある場所である。現今ある路傍の石の祠は、その霊を祀ると言い伝えて、なかには童形の石地蔵がある。武田家に人質となっていたこの童子が兄信昌の徳川家に傾いた犠牲となって、ここに連れ出され、付添いのおあわという女性とともに一四年の生涯を終わった地であった。それで以前は地内の雑草一本を折っても、たちまち怨霊の祟りありと怖れられた地である。これについては単に言い伝えのみでなく、確かな記録もある。すなわち寛政一三年〔1801〕鳳来寺山東照宮別当松高院より、寺社奉行にあてた書状の写しに、

（前略） 旧跡当時金剛童子社外水田中有之右石祠有之森形に相成居候。平日近所の人民少計にても右森の樹一枝一葉にても折取候へば立所に発熱発狂仕候故一向指寄不申候。依て雑木年に立繁田所持主甚難儀仕候得共致方無之在来の儘指置申候。

（後略）

こうした問題の場所に金剛童子を祀り、一方そこに狂言の舞台が設けられていたことは、ことに注意を惹く問題であるが、さらに同じような例は他にも段々あり、そこから延いて例を索めると、祭りの意義から、さらにこうした場所に舞台をおく

に至った一面の思想も考えられぬではないが、推論は別として、事実の採録を先とする。ちなみに金剛堂にあった舞台は、前言った如く能舞台を途中で改造せるもので、いわゆる廻り舞台で、中央に真柱があり、それに舞台を冠せる仕掛けのもので、一般に鍋蓋と呼ばれていたのである。

<Ⅲ>

鳳来寺狂言の下の舞台の事実から、さらに上の舞台の位置を思い出してみると、これには何の証拠とすべきものもないが、これまた何らかの信仰に関係を持つ因縁の場所であつたらしく、言伝えでは単に傍に郷倉ごうくらが在ったというが、それだけではなかつたらしい。郷倉の跡に石仏が一行に並んでいたことは、これをそこに持って来た動機から考えて、単なる偶然とは決めてしまえぬのである。その事実については別に言うこととする。

さて舞台の位置が何らかの信仰的に意義のあつた地とする事例のわかるものでは、鳳来寺山から東方に当る、八名郡大野町〔現、南設楽郡鳳来町〕の舞台の位置なども考えるべきものであつた。

大野は八名郡内では唯一の町で、付近の物資供給の中心地であるだけ、地狂言に関する事実などと言え、何か在郷の衆の昔話ぐらいにしか考えそうもない土地であるが、ここもつい三、四〇年前までは、付近の他の村々の例に漏れず、地狂言全盛の地であつたことは、前言った大野衣装の語り草が残っていることでも想像される。同所は昔伊勢大神宮おんぞに御衣の布を納めたとの伝説のある地で、今もまだそれを織つたと伝える屋敷はわかっているくらいであるから、一度内部に入って観察すると、一面には甚だしい変遷は行われていなかったのである。そうして昔ながらの旧家という旧家が、言い伝えを辿ってみると、いずれもいわゆる狂言系に属していたのも、考えようによってはゆかしい次第であつた。

同所の氏神牛頭天王社の祭りに伴う狂言は、つい近世まで続けられていたのであるが、伝統的の仕来りは、明治六年を最後にいったん亡びたのである。それが何かの動機でそれから約一〇年後の明治一六年に、一度おこなつた事実がある。そのときの狂言は、以前の舞台からは二町ほど離れた田圃の中へ、小屋掛けをして演つたが、これが今も故老の言う明治一六年の回向狂言である。どうした由来で回向狂言などと言つたかはもうわからぬが、もちろん、この名を言うには十分理由があつた

と考えられる。

回向の語を用いたからには、何ものかへの回向供養であったことは当然考えられる。たぶんこうした由来だったろうと推量されることは、他の土地に例があった。大正何年だったか確かな記憶はないが、ある年帰省の際に南設楽郡東郷村〔現、新城市〕を歩いていて、同行の老人から寒狭川の岸に沿った河原に狂言のあった話を聞いた。白く光る河原を指して、若いころそこに小屋が掛かって地狂言があったと聞いた時は、格別気にも止めず聞き流したが、後に他の人々の談で、その傍の淵で、不慮の死をとげた人々への、回向供養の意味であったことを知った。大野における回向狂言が果たしてそうした対照によっていたか否かは断言できぬが、動機はほぼ同じであったろうと考えられる。

大野の回向狂言の動機は、私の想像するところでは、明治六年に中絶した狂言に関係をもっていたと考えられる。それには順序として、この中絶した狂言と、一方祭典の次第を言う必要がある。同所の祭典は、時期は陰暦三月で、いわゆる宵祭りの日に、村の中央にあった社から出て、町内を練って御仮屋に納まった。御仮屋は地理から言うと土地の上の端れで、小さな流れを渡った土橋の彼方であった。そして神輿が納まると同時に、その夜から御仮屋に向かって正面に建ってた舞台上で狂言があった。

現今はこの御仮屋も舞台もともに取り払われ、そのあとには区裁判所の出張所が建ち、付近にも家並みが揃って、立派な町の一廓になっているが、当時は付近に屋敷はなかったのである。そうして御仮屋と並んで、別に千日堂という堂があった。この堂が鳳来寺狂言における金剛堂の關係に似た因縁があった。堂内には閻魔を初めとしたいわゆる十王の像に、しょうづかの婆の像などが並び、その他たくさんの仏像や、石の五輪等もあって、現在六〇歳以上の老人達は、ここでそれらの仏像を持って遊んだものといっている。そんなわけから例年盆の一四日には、町のもがこの堂に集まって百万遍の念仏供養をしていたのである。その他虫送り、疫病祓い等もすべてその傍の土橋を境に行われたので、一面から言って何がな陰惨な感じのする場所であった。それが祭典すなわち狂言の時にかぎって、堂の前、すなわち御仮屋と舞台の中間の空き地に、所嫌わず筵を敷いて観衆が割り込み、弁当を開き酒を呑んだりしたのである。

この舞台の位置から御仮屋と千日堂の關係を、鳳来寺狂言の下の舞台の事実に対照して考えると、これがまた問題の場所だったのである。言い伝えによると、同所

は昔戦死者の骸を葬った塚処であった。千日堂もおそらくそうした因縁から存在したと考えられる。

天正元年の夏、初度の長篠合戦のおり、寄せ手のために討死した当国の鈴木喜三郎初め多くの武士の墓所で、明治初年までは、千日堂から一〇間ほど西よりの田の畔に、三抱えほどもある「たま」の大木があったが、そこが骸を埋めた地とも言う。なおこの事跡については、約二〇〇年前に作られた「鳳来寺聞書」、「大野辺聞書」にも同様の記載がある。一部を左に抄録すると、

鈴木喜三郎ノ墳、大野千日堂ニアリ、天正元年七月甲州ノ山県三郎兵衛ガ先鋒、
遠江ヨリ攻入りシ時、山ノ吉田ノ城主、鈴木喜三郎太夫助勢ノ為メ、大野井代^{いしろ}
ノ城主菅沼常陸、鈴木平兵衛ト共ニ、一族引連レ仏坂トイフ処ヘ立退キ、此処
ニテセリ合合戦アリ、喜三郎河合治左衛門ナド討死ス、此塚ナリ（後略）

同じ長篠合戦のおり、戦死者の屍を埋めたと伝えられる信玄塚（古くは新聞と書く。南設楽郡東郷村大字信玄にあり）は、道路脇に俗に大塚小塚と称する大小二基の塚があり、これを一に千人塚とも称して、ここ二〇年前までは、陰暦七月一四日

夜に、塚脇の広場で火踊^{ひおんどり} という行事があった。その次第は村内の若者が各自、萱や
藁で作った直径二尺以上もある松火を昇ぎ、これに火を移して頭上で振り回しな
がら鉦太鼓の拍子で塚を巡り、後は互いに入り乱れて踊る。私も幼少の頃見物した
ことがあるが、その光景は壮観を極めたものであった。この行事の由来として伝え
らるるところでは、合戦の後、屍をここに集め塚を築き祀ったところ、その年の六
月に至り、塚の付近より大蜂無数に現われ、行人を悩まし、ために通行もなりがた
く、付近のものも難儀に及んだ。そこで亡霊の致すところと大いに怖れ、諸宗の僧
侶を招き供養を営み、以来年々火踊りを行うこととなったという。

なおここにも塚の傍に庚申を祀る堂があり、これを千堂と称し、堂守は代々尼で
あった。境内に椿の古木一株あり、枝に黄金の燈籠が下るとか、根元に黄金を埋む
などと各種の伝説がある。

以上の如く長篠役の戦亡者を葬る地に、塚所を設け念仏者の堂宇が建っていたこ
とは、当時こうした場所を中心にして、一部宗教者の活動が考えられるのである。

<四>

祭典に神輿が出て、村内の一個所に設けた御仮屋に納まり、そこで狂言があるこ

とも、またその御仮屋の位置が何かしら因縁の絡まる場所であったことが、鳳来寺大野とほとんど似ていた地に前言った長篠がある。

ここの氏神は富永神社と称し、祭神は現今では諸冊二尊に日本武尊となっているが、その以前は牛頭天王を祀り、現に今の社務所の押入れには、その尊像が埃にまみれて押し込まれてあった。例祭は四月二二日になっているが、以前は旧暦三月一八日で、当日は神輿が社殿から東南方に当る字前野の御仮屋へ渡り、その舞台上で狂言が始まったのである。

前野は村の地形から言っても東南寄りの一段低い僻地で、一方は三輪川の谿に臨んでいた。ちょうどそこから川向いの八名郡舟着村〔現、新城市〕へ越す渡し場の降り口である。現今では御仮屋も舞台もともに取り払われて、付近は一帶の桑園であるが、明治二〇年頃は、そこに二間に三間の白壁造りの御仮屋があり、それに向い合って立派な狂言舞台があった。この見物席もまた御仮屋と舞台の間であった。舞台は長篠舞台と評判されただけ、この界限としては立派なもので、六間の幕摺は銀杏の木で、それに伴う柱から引戸の末に至るまで、ことごとくが一本の木からできていたのである。楽屋は舞台うしろの床下にあり、そこから花道奥へ通じた路は、トンネル石畳みにできていたそうである。

現今路傍に一基の石の祠が残っている塚があるが、そこがすなわち以前の舞台跡である。祠には文化丑九年（1812）の文字が見えるのと、屋形の棟に木瓜の紋が刻まれてあるほか、中に神体も何もない。この頃誰となく齒の神様だなどと言って、煎豆を供える風がある。この祠には一つの伝説があつて、その伝説がやがてこの舞台の由来を幾らか説明しているのである。

祠の神を土地の人々に訊くと「やすら」様と呼んでいる。別に「やすら」大明神とも、あるいは「やすら」姫と説くものもあるが、いずれも「やすら」と呼ぶことに変わりはない。一方「やすら」様と言っているものの説くところでは、昔この前野の里へ一人の長袖がどこからともなく落ちて来て、庵を結んでいたと伝え、前野の地一帯を長袖様の隠れ里と言っていた。長袖はこの地方の伝承では法印、修験者、僧侶の類を指すのである。よってみだりにそこへ立ち入れれば祟りありと恐れて、土地は荒れに荒れ、一帯が茫々たる草原となり、その中を一筋路が通っただけで、かねて村の馬捨場になっていたのである。

話が脇道へ外れたり前後するが、この前野の舞台のあった位置には、明治維新まではそこに大日堂という念仏堂があつて、本尊大日如来を初め、他に十王像が祀っ

であった。傍に一株物凄いばかりの銀杏の大樹があった。この大日堂は明治になってから村内の他の位置に移して、今はそこに建っている。

村の馬捨場と言ひ塚と言ひ、またはこの大日堂にしてもそうであるが、前野一帯の地が、村の中でも一種陰惨な境地であったことは容易に想像されるのである。

<V>

ここの「やすら」様の塚には、今一つの伝説があった。ある時この前野の近くの屋敷へ、日の暮れ方になるときまって杵と篩を借りに来る若い美しい一人の女性があった。そして夜遅くなると、どこからともなく杵の音が聞こえてくる。不思議なことにその女というのが、土地ではかつて見かけたことがないものであった。家のものが不審を起こしてある時女の後を尾けて見ると、「やすら」様の塚の傍までゆくと姿を見失ってしまう。そうして幾度やっても塚の近くで見えなくなる。どうもあの塚がおかしいとあって、一日塚を掘り返してみた。すると底から一個の赤い甕が出てきた。蓋をとると中には白骨がいっぱい詰まっていた、開けると同時にその白骨が、ことごとく真白い蝶に化してどこともなく飛び去ってしまったというのである。

いかにも美しい春の日の夢のような物語である。村の人たちも一度聴いたら、ふたたび忘れそうもない話であるが、不思議とこの話を知っているものが村にはもう少なかった。あたかも大正一一年の秋だったが、私は郷里へ帰った折、わずかの時間を利用してここの舞台跡を見に行つて、祠の前に立っていると、偶然その場へ枯草を背負つて来合せた五〇恰好の女から聞いたのである。今思うと不思議な因縁事である。だんだん話すうち、その女というのはこの祠を熱心に信仰しているものであるらしかった。何でも初めてこの地へ嫁に来た一八とかの年に、淋しくて仕様のなかつた時、その家の八〇ばかりになる婆さんが聴かせてくれたとのことであつた。

話がまたまた脇道へそれてしまつたが、前の塚を掘つた話の続きがまだあるのである。白骨が真白い蝶になつて飛び去つたのを見た男は、余りの不思議さに何か崇りでもあつてはと、すぐに法印を頼んで伺いを立てると、吾を信仰して節々の祭りを怠らぬならば、この前野の地へ白水を流さずであろうとの託宣であつた。白水は米の研ぎ水で、つまりその地を繁昌させんとの意味である。

それからどうかはわからぬが、毎年盆の一五日の晩には、村内のものが集まつて第一番にここで放歌を踊り、夜念仏を上げる仕来りになつていて、狂言のあつた当

時までは、決して欠かすことはなかったのである。

<VI>

放歌を踊り夜念仏を上げることは、もちろん何人が見ても結構なことであったが、そこで狂言があることは、昔の心持を忘れた後では理屈に合わぬ節があった。それは狂言が始まると、「やすら」様の塚がちょうど見物の席の中に入って、酔ったり騒いだりする人びとのために、祠が多勢の人から踏み荒らされることである。明治になってそれを気にした村内の有志が、村の医王寺の和尚に頼んで、他へ遷座すべく一応の伺いを立てると、その託宣に、吾はこの地へ鎮まるべき覚悟なれば、いかに諸人に踏み荒らさるるとも座は変えぬとの御告げであった。よって、以来そのままになってきたと言っている。

ちなみにここの舞台の、幕摺が銀杏であったものは、明治の少し前頃の新築であった。材料に使用した銀杏というのは、実は前言った大日堂の境内の木を伐って用いたのである。舞台における幕摺は最も重要な部分で、信仰上にも深い意義があったはずである。それに充用する材料が、まず因縁の霊木であったことは注意すべき問題であった。しかもそれ以前の舞台は医王寺の建物を移したもので、その前は大日堂がすなわち舞台であった。

舞台の幕摺に特殊な場所の樹木、言い代えれば霊木とも考えられるべきものを選んだ事実は、長篠とは川一つ隔てた東郷村有海〔現、新城市〕にもあった。明治初年舞台改築の際、村の三昧の中心であった焼香松と称する古木を充用したのである。これらも近世の墓地観念と氏神の神聖から言うと、本末を弁えざるの甚だしいものであったが、これは対氏神観念の変遷と、狂言のより来った経路から言えば、自然に氷解される問題であった。前の大日堂の大銀杏と言い、この三昧の焼香松といい、これを拝殿すなわち舞台の幕摺に使用することを当然とする伝承が、村人の心の底を潜って流れていたのである。

その意識の反映と考えられる事実は、その年の秋、暴風のために新築の舞台は倒壊したが、誰一人これを三昧の焼香松を伐って用いた祟りとするものはなかった。以前からの位置を、少しばかり移動した神罰と畏れて、再築の際は、氏神社殿の正面、すなわち拝殿舞台に改めて事済んだのである。

これまで言ったところでは、地狂言の本来の思想は、氏神の祭りかあるいは豊作祝いのものであったに拘らず、一面には死者の靈魂を弔う供養の意識が陰に働いて

いたと考えられる。狂言舞台は祭りに重大な関係をもつ御旅所とともに、本来不浄の地であったはずの、刑場の跡やあるいは死者幽魂の留ると信じられた地に設けられていたことは、第一に考うべき問題であった。よって次には、こうした場所にもつとも因縁の深い盆踊りから、ひいて盆狂言の事実を言ってみる。このことがやがて神社すなわち氏神の祭り、亡霊供養との間を繋ぐ一つの結び目でもあった。